

曹洞五位説の根本性格

——「元真長老棟」を中心として——

新井勝龍

はじめに

曹洞五位説には、偏正五位・君臣五位・功勲五位・王子五位の四種の五位があるが、ここでは五位説の代表として、曹洞宗旨を最も明らかに表していると考えられる偏正五位において、その根本性格を述べてみたい。

そこでまず、この偏位五位についての従来の理解をみると、通常臨済禅が見性中心の段階修証を重んじ、その代表的機関である四料簡はその特性をよく表わしているのに対し、黙照といわれる曹洞禅の代表的機関である偏正五位は、四料簡とは対照的に綿密な論理性を中心としている、といわれている。

しかし論理性のみがその特質であるとするならば、華嚴の四法界観門等は内容構成共に偏正五位に酷似し、且つより詳細密な論理展開があることからいって、偏正五位は数学の

単なるエビゴーンとされざるを得ないであろう。

思うに数学に対する禅門としての意義は、所謂数学論理が体得の法でないので、直下承当を目指し、主体的な実践を尊ぶところにその特質があるといえるが、禅門実践は仏教の根本道理の体得そのものであるので、教学的な論理も当然その中にある。

けれどもその論理のみを中心に禅を捉えようとすれば、禅的特質はさながら網の目から水が洩れるように洩れ出してしまふものである。

偏正五位の理解についてもこのことは当嵌まる筈であり、それは偏正位説の原典とされる洞山良价（八〇七—八六九）『五位頭訣』とそれを註釈した洞山の資曹山本寂（八四〇—九〇二）「棟」を虚心に見るならば、直きに理解できることを私は述べたことがあるが、このことは一般の研究者には曖昧のままであるようである。

その理由を考えると、右の洞山と曹山の書が甚だ難解のため、結局顧みられず、只曹洞五位に関しては曹山の比重が非常に重いので、曹山が曹洞五位を更に分り易く教学用語を借りて理論的に説いた『五位君臣旨訣』や逐位頌が専ら重んじられ、以後の解釈は論理性中心となった。かくして先きの洞山と曹山の書は中国では昧没してしまつたのである。

日本では、既に中国では失われてしまつたこの書を、室町期で受伝え重んじて現代に至つてはいるが、それを解するのには曹山以後の論理的な五位理解を勘案し、かつ論理的に解された『正法眼蔵』からの理解を基調としたため、結局論理性のみが強調されたのである。³⁾

それは近代眼蔵理解の元祖西有稷山禪師（一八二一—一九一〇）が眼蔵理解における道理性涵養の爲として、論理性強調のある指月慧印（一六八九—一七六四）『不能語五位説』を提唱しているのに窺うことができる。³⁾

このような五位の論理的理解に問題があることは、昨今道元禪師の実践的性格を主張する人々から、論理に堕した五位説が道元禪に関係のある筈はない、と否定されているのが多分に肯綮に当たることからも分る。

よつて従来の研究の不備を考えると、日本で曹山の五位頌訣を対象としたのはよいが、その場合余りに曹山の結論のみを追ひ、曹山が偏正五位宣明に志した動機を軽視したこ

とにあると思われる。動機にその真義がよく表れるというのが常識であるにも拘らずである。

この曹山の動機とは、その揀の中で、
今見^ル諸^ノ学^ニ士^ヲ詮^ニ先^ニ師^ノ意^ヲ度^シ似^シ有^ル誤^リ彰^リ不^レ免^ル聊^ニ爲^ス敘^ス其^ノ差^ヲ当^ニ魂^ニ。⁵⁾

と、当時洞山派下で五位を諸師が誤り唱えていたので、それを正せんが爲に自ら説かざるを得なかつたと述べているのに、明快に示されている。

その中の曹山の言からみて、当時の諸説の代表とされるのは確かに『重編曹洞五位』『元真長老揀』として記載されているものである。してみれば五位研究の第一歩は、この「元真長老揀」を仔細に検討して、それに批判するものとしての曹山説の意義を探るべきであると思う。

よつてここでは元真説を中心に、それに対する曹山説の意義をみ、それと道元禪との関係を考えることにより、五位説の根本性格を見直してみたい。

一、元真長老揀の特質と曹山の批判

元真説の特色は種々挙げられるが、ここではスペースの関係上、a 賓主対立・円熟未円熟相對、b 主体の偏重、c 無の尊重の三点に絞つてみたい。⁶⁾

a 賓主対立・円熟未円熟相對

五位が祖師の施設として縁に対するものであることに變りはないが、具体的にはその場合、迷悟隔別を強く意識して迷者への對機方便を重んずるか、それより迷悟を余り意識せず真実を解明して示す方に力点を置くかによりその性格は大きく分れるが、前者が元真説の立場、後者が曹山説の立場とみられる。

即ち元真是五位を「欲_レ使_レ後進之輩……知_レ賓主之次第_一達_中偏正之兩端_上矣。」るものという。ここで賓主の次第とは、五位の一位々々を問者である賓と答者である主との對立においてみるのをいう。

又「問語有_レ麤細_一答有_レ淺深_一」としているのによれば、遂には洞山の究極義としての偏正の真義に達せしめんとするものであるにしても、問答賓主の對立の中で境界としての円熟未円熟の差異のあるのを当然と認めるものである。

これを曹山は批判して、洞山の本旨は
不_レ爲_レ明_ニ功進修之位_ヲ兼涉_ニ教句_ヲ直是_ニ格外玄談要絶妙旨_ヲ祇明_ニ從上物体現前_ヲ冥叶_ニ古聖之道_ヲ。

と究極の真実を明示するにあり、未円熟な境界に渉るものではなく、問答の對立を必須とはしないという。

勿論未到者を導くこともないではないが、その場合も直下に真実を指し示して導くとし、主客や到不到の對待への顧慮は本来のものではないとするのである。

曹洞五位説の根本性格(新井)

b 主体の偏重

元真是又正中偏の正位の例語として、雲巖の語「独_ニ脱_ヲ物外_一。起_ニ衆聖之前_一。」という、主体が万物を超越し仏もこえ、自ら尊しとするところをいうとしている。

しかし曹山はこの例語を、単に客体に対する主体の尊貴を述べたに止まり、主体の没蹤跡究尽に到ってはず、主体の偏重にとらわれていると批判する。

又元真是偏中正で偏位の例語として、魯祖への或僧の語「出息不_レ依_ニ衆縁_一。入息不_レ居_ニ蘊界_一而住。」という語を、出入の息という縁(偏)において、それが他に依らない自在性を持ち、偏位を究尽したものであるという。

曹山はこれを、前の主体の独脱を批判したのと同じ理由で未円熟の語としている。

c 無の尊重

元真是次に正中來の俗語として「某甲擬_レ問_ニ道_一不_レ得_ニ時如何_一。」という問に對する「我亦道不_レ得。」という答を引用し、これが問も答も無を述べたものとして、賓主具足したものと述べている。

しかしこれでは無に無を重ねるのみの、無の一方に偏したものといわざるを得ない。

曹山はこれを批判して、葉山が「我有_ニ一句子_一未_ニ嘗向_レ人説_一。」といったのに對し、道吾が「相隨來也」(その言葉です

っかり説き尽くされて了った」と述べたのこそ、すぐれた例としてゐる。

究極の一句とは、とても説けぬというところに説かれぬいていとするもので、無に徹する正中来とは、有に転換し得る有無の対立を超えた綿密な把握にあることを示しているのである。

d 両説と洞山説

以上をまとめてみよう。元真説は所謂の禪の立場として、迷悟の対立を前提とする主体的な実践的体得を重んずるものとして、洞山の究極説を目指しつつも、主体の確立がまず尊ばれるべきこととして、客に対する主体の特別な意義自在性を特に強調し、そのためにも基本原理としての無を特に重んじ、迷の未円熟を必ずしも否定しない。のみならず正偏位についての宗旨よりする円熟した見方に対する無理解すら見られる。

これについて曹山は、それでは境界的に未熟に留まり洞山宗旨に達せぬと批判し、無にも滞らぬ無の徹底において確立されている主体の故に、主体の自在の跡も残さぬことを重んじ、かくして自他の対立の跡を残さず、円熟未円熟の隔別に滞るのを超え、円熟の極を明らかにしその直指を重んじたのである。

この両者の説を洞山説と比較すると、刮骨禪といわれる洞

山が没蹤跡を徹底強調し、刮りに刮って刮ることもなくなつた無為自在なところに綿密兼帯なるあり方を尊んでいることを思う時、元真の説には到らぬところがあり、曹山の説は到つたものといえよう。

では曹山説が洞山説と全同かといえば聊か問題があり、洞山が曹山説の如く明確に説いたのであれば、元真説が生ずる筈はない。恐らく洞山自身は、人によつては元真説のような未熟な立場も許容して説き、人によつては曹山説の如く至極のところを他と揀別して示したりしていたものと思われる。

これを曹山は統一して、洞山の究極説を暗頭兼帯（真実の兼帯）とし、元真により混同された未到の説を有病兼帯（病める兼帯）として厳しく批判しながら全く否定することはせず、真実への途中の兼帯としているのは、洞山説を巧みに体系化し、誤解しようのないものにせんとしたものといえる。

ところで従来この曹洞五位が日本曹洞宗旨の根拠とされていたにも拘らず、その理由が論理性中心であつたため、現在これを疑問視する風潮のあることを最初に触れておいたが、以上の五位理解を基として、この問題を考えてみたい。

二、元真・曹山説と道元禪

元真・曹山説が道元禪の根拠たることの意義を確かめたいと思うが、それには便宜上元真説の特質についてあげた三項目

の下に考えてみたい。

a 賓主対立・円熟未円熟相對

まず賓主対立についていえば、『正法眼藏菩提薩埵四摂法』では利行を述べて

利行は一法なり、あまねく自佗を利するなり。……自にも不違なり、佗にも不違なり。たとへば人間の如来は人間に同ぜるがごとし。人に同ずるをもて、しりぬ同余異界なるべし。同事をしるるとき、自佗一如なり。

といい、実践的に全く自他一如觀にたっている。

又円熟未円熟相對についていえば、道元禪師は迷者を導くにも、方便を用いず真実のみを説くべきであるとし、自己他已ともに本来大悟者とするのみならず、山河大地も証上のものであることを強調し、自己の修証が山河大地を修証せしめると述べ、自他一如で証を徹底せしめてゆくのは、元真にもみられる禪の実践強調にたちつつ、曹山が洞山説の究極として述べている特色を展開させたものといえる。

b 主体の偏重

主体の偏重の問題についていえば、元真は「出息不_レ依_二衆縁_一」入息不_レ居_二蘊界_一」の出入息の自在さを主体のすぐれたあり方とするが、曹山はそこでは主体の偏重の跡が残っているので、未円熟であると批判する。

『正法眼藏看經』ではこの語を、出息の衆縁に不隨なるの

曹洞五位説の根本性格(新井)

みにあらず、衆縁も出息に不隨なり。不隨とは渾隨なり。」とし、又不居蘊界について、「五蘊に不居なるは五蘊いまだ到来せざる世界なるがゆゑなり」としている。

これは出息と衆縁、入息と蘊界について、その全き一如の故に、出息入息をたてるときは衆縁蘊界が跡形なきものとされる如く、衆縁蘊界からすれば主体が跡形なきものとなるとし、結局それぞれの当体脱落全現成を述べたものとして肯定しているわけで、元真により誤り單純に否定されたので曹山により批判されたものを、曹山の根本道理に沿って肯定すべきものと捉え直した如くである。

かくして綿密極まりない証悟の世界を説くことにおいて証上の修の世界を展開されたものと思われる。勿論これには、元来主客一如の傾向が強く仏祖への絶対帰投を尊ぶ日本の思想の土壤の介在を考えねばならぬのは当然としてもである。

おわりに

以上、部分的に過ぎないが曹洞五位説の根本性格を、元真説をその批判としての曹山説においてみ、更にそれが正法眼藏において展開されているとみることにおいて、中国日本の曹洞禪を一貫する宗旨の骨髓を表したのとして理解し直すことができることを述べてみた。

このように元真説から曹山説をみるという方法を仔細にす

ると、現在曹洞五位について非常に曖昧視されている資料の見方とか、従来問題視されてきた曹山の兄弟子で洞山の一番弟子であり且つ道元禪師の法系である雲居道膺（？—九〇二）が五位を用いた跡がないことや、また道元禪師は曹山の理論的な五位説は知ってはいたが、最も肝要な洞山『五位顯訣』や曹山「揀」をみた形跡がないのに、何故そこで示される五位の深義を説いたといえるか等に関して、従来とは別の理解もなされてくるのであるが、これについての説明はスペースの都合上他の機会を俟ちたい。

- 1 『日仏学会年報』第45号所載拙論「道元禪師における修行とその論理的根拠」391頁『印仏研』第23巻第2号所載拙論「中国曹洞禪と機」298頁参照
- 2 『曹洞宗全書』注解五4頁以下。以後『曹全書』と略称。
- 3 日本で最初に同書を伝えたのは室町期傑堂能勝（一三五—一四二三）南英謙宗（一三八七—一四六）『洞上雲月録』頭訣耕雲註種月揀撫箋で、伝写され江戸期延宝八年（一六八〇）に刊行され現在に至っている。そこでは五位を曹山創説の易卦によって、陰陽理事を用いて解釈し、更に四十九策を眼蔵の「修証即不_レ無汚染_{（キ・アラハル・ケツト）} 即不_レ得_{（キ・エラハル）}」を引用し不染汚の修証で説いている。
- 4 指月は江戸時代のすぐれた五位復古者とされるが、その著『洞山悟本大師五位小説』では始めに華嚴四法界観門を概説し、この正偏により五位が説かれたとしているのは、現代も変らぬ一般的風潮である。『曹全書』注解五49頁以下参照。
- 5 右書5頁
- 6 この外無理会話の尊重・教句との混同・功勲との混同等が挙

げられる。

- 7 『曹全書』右書24～26頁。以下元真説は同頁による。
- 8 右書5頁。
- 9 右書13頁。
- 10 右書6頁「此例語。是古人道過跡尚存。……此復呼_{（レ）}為_{（レ）}非_{（レ）}正位_{（一）}也。」とする。
- 11 右書10頁「此語全是功。不_{（レ）}同_{（ジヤウ）}縁中認得_{（ム）}。」とし、偏縁の没蹤跡に到らぬとする。
- 12 右書7頁「此_{（ハ）}是他妙_{（ハ）}會得_{（ム）}」と讃める。
- 13 中文出版社『祖堂集』64「師（洞山）示_{（シ）}衆云諸法有_{（ハ）}驚_{（ス）}人_{（ノ）}之句。我這裏有_{（ハ）}刮骨之言_{（一）}」とあり、それにつづいて四方八面に刮りに刮り刮るのもなくなっているところを譬えて「世医拱手」名医は手を下すことなく治癒せしめると、無為の化で説いている。これは綿密没蹤跡にして有無に落ちぬ兼帯のすぐれた例といえよう。元真もこれを引用しているが、理解の徹底に問題があることは既述の通りである。
- 14 『曹全書』注解五13頁。有病兼帯は同書6・8頁。「途中の兼帯」は同書8頁で「玄学路中」と表現している。
- 15 岩波文庫本中186頁。以下正法眼蔵は同書による。
- 16 上39頁「大悟」「遮裏に不悟者の一人をもとむるに難得なり。自己の昨自己も不悟者にあらす。佗己の今自己も不悟者にあらす。」下234頁「唯仏与仏」「山河および大地すなはち全露法王身なり。……すでに法王の身にてあり。」
- 17 上39頁「谿声山色」「如今の修行なる四大五蘊のちから……山河大地日月星晨までも修行せしむるに、山河大地日月星晨かへりてわれらを修行せしむるなり。」
- 18 『宗学研究』第28号志部憲一「『重編曹洞五位』について」
△キーワード▽ 宗旨、曹洞禪、曹洞五位

（駒沢大学教授）